エンドハウスの怪事件　　PERIL AT END HOUSE

1990年作品

製作：ブライアン・イーストマン　　監督：レニー・ライ　　脚色：クライブ・エクストン

日本語版プロデューサー：里口 千　日本語版演出：山田 悦司　日本語版翻訳：宇津木 道子

出演：

エルキュール・ポワロ … デビッド・スーシェ／熊倉 一雄

ヘイスティングス大尉 … ヒュー・フレイザー／富山 敬、安原 義人

ジャップ主任警部 … フィリップ・ジャクソン／坂口 芳貞

ミス・レモン … ポーリン・モラン／翠 準子

※　※　※

ニック・バックリー … ポリー・ウォーカー／中村 晃子

ジョージ・チャレンジャー中佐 … ジョン・ハーディング／前田 昌明

バート・クロフト … ジェレミー・ヤング／増岡 弘

エレン … メアリー・カニンガム／吉田 理保子

ジム・ラザラス … ポール・ジェフリー／大塚 芳忠

フレディー・ライス … アリソン・スターリング／加藤 みどり

チャールズ・バイス … クリストファー・ベインズ／小川 真司

ミリー・クロフト … キャロル・マクレディ／前田 敏子

マギー・バックリー … エリザベス・ダウンズ／安達 忍

©ITV Studios Limited 1990

ポワロとヘイスティングスは、南イングランドのセント・ルーで休暇を過ごしていた。そこで知り合いになった美女ニックが忘れていった帽子に銃弾の跡があるのを見つけたポワロは、彼女が住むホテルの近くの大邸宅を訪ねる。聞けば彼女は、それまでに3回も危険な目に遭っているという。そして海岸で花火が打ち上がったある夜、ついに殺人事件が起こる。誰が何の目的で殺人を犯したのか？ポワロは真相究明に乗り出す。

◆シリーズ初長編

これまで短編原作のドラマ化に努めてきた本シリーズが、第2シリーズ冒頭で初めて長編原作に挑んだ力作です。イギリス本国では前後編の二話構成で放送され、日本での放送に際しては一話構成の長編ドラマとして公開されました。

初の長編ながらこのドラマの魅力をバランスよく備え、シリーズ中盤以降続くことになる長編期のプロモーションを担う、一つのターニング・ポイントとなりました。時間をかけ念入りに描かれる伏線、巧妙なミスディレクション、意外極まる犯人、その正体を明かした時の豹変、どんでん返しが二度ならず続く驚愕のラストと、ミステリ・ドラマの醍醐味を存分に味わえるシリーズ屈指の一作であり、序盤では一、二を争う傑作です。

◆変わらぬ気質

長編だけあって、抱腹のユーモアもふんだんに盛り込まれています。例えば、事件の合間に思い切りゴルフを楽しもうとあがく不謹慎なヘイスティングス。カーマニアで、スポーツ好き、美女に弱く、絵に描いたような単純思考と、本話に至り、彼が“子供”として描かれていることにお気づきの方も少なくないでしょう。

ポワロにまつわるユーモアですが、朝食の席で「この卵は食べられません…サイズが違い過ぎます」と憮然とするシーンについて簡単に申し添えておきますと、朝食には、正方形に切り揃えられたトーストと、正確に同じ大きさの2個の卵を食べると云うのが、彼の美しき生活習慣のひとつ。しかしながらここマジェスティック・ホテルで出された卵は、彼にとってはかなり不揃いだった為、ご機嫌斜めというわけです。

こうしたユーモアの反面、本話のラストにおいても、犯人の行く末に投げ掛けられた、冷酷と哀れみ相半ばするポワロの視線に、殺人を厳しく断罪する彼の気質が窺えます。

◆夫妻の声

本話の出演者について些細な話題を幾つか。主役格ニックに扮したポリー・ウォーカーは後にハリソン・フォード主演の映画『パトリオット・ゲーム』(1992)に出演しますが、これには本話で共演したヘイスティングス役のヒュー・フレイザーも同じく顔を見せています。それから、エンドハウスの別棟に住むミリー・クロフト役を芸達者に演じたキャロル・マクレディは、本シリーズ後期の『鳩の中の猫』でも別役で出演しています。

日本語版で、妖艶なフレディーの声を担当した加藤 みどり氏は国民的アニメーションとも云うべき『サザエさん』不動の主演ですが、そのサザエさんの夫君マスオさんの声は、本話でミリーの夫バートの声を吹き替えた増岡 弘氏。奇しくも、フグ田夫妻の声が揃った本話となりました。